
スオムスへ派遣

月光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スオムスへ派遣

【Nコード】

N4765V

【作者名】

月光

【あらすじ】

とある男性ウィッチはスオムスへ赴くのであった

極寒の地へ転属（前書き）

復活作です

極寒の地へ転属

「なんで俺がスオムスなんかに」

「黙れ、仕方ないだろう」

私は鹿樫院葵 階級はどのくらいだろう？

私の仕事は色々 ストライカーのテスト ウイツチの不審な行動の
監視 e t c

と、とにかく言われたことを必ずやりとおすんだがちょっと今は頭にきている

「あんだだけ、アフリカに送ってくださいといったじゃないですか」

「確かにお前は優秀な人材だ、しかし寒い所でテストしたいんだ。」

「それで行けと」

「そお〜」

「なにが そお〜 だー」

「わかったではまだ初開発したこいつを使ってくれ」

と行って窓を見た

窓には一人のウィッチがなれない機体に奮闘している
たしかゼロ戦じゃなかったけ

「あれを運用するにはまだ色々なデータがほしいからな」

「えっ 要するに実験に協力するのか?？」

「ああっ」

「寒いのも無理なんですけど」

「こらえろ」

「はい……………」

「あのテストしてきてもよろしいですか」

「ゼロ戦をか?」

「はい」

「いいぞ もう2機目が製造してあるんだ

しかし試作エンジンだ命の保証はないぞ」

「かまいませんよ」

「じゃあ A格納庫に技師を派遣しとくよ」

「ありがとうございます」

格納庫に向かう途中

「あつどこつていってましたっけ」

「義勇独立飛行中隊だ」

「そーだそーだで名前は強そうですね」

「名前はな……」

そう呟いたみたいだが栄治には聞こえなかったみたいだ

下に行つてみたらずいぶんスペックが違う事に驚いた

エンジンはなんだこれ

「このエンジンなんていうんですか?？」

「まだ名前はありませんが 従来の栄に比べて300kgぐらい重
たくなっています」

普通のゼロ戦に積むと木っ端微塵になるとおもわれます。

しかし並の機体ではありません きつちり補強も入れてあり頭でっ
かちならないように

胴体の方も少し太らせてあります。その分空気抵抗が大きいです
が パワーは2倍は上がつてると思われます。」

「最高速度は？」

「629キロですがあくまで目標です」

このエンジンは後の雷電に積まれる物である

「で さっきのウィッチはこれと同じ物を」

「ええっ かなりの重たさに悲鳴をあげております」

「ちよつとテストしてくる」

「はい」

早速ストライカーを装着した

「おい、20mmは？」

「えっ大丈夫なんですか??」

「あつたりまえだ 俺は実戦に赴くんだぞ」

「はい………」

早速滑走路へ

「テストス ど、どうですか調子は」

「絶好調と言い難い所だが熱を持ち過ぎているこれじゃ30分持たないぞ」

「すぐに着陸するぞ」

「了解です」

すぐに技師と話した

エンジンを冷やすために巨大なファンを付けなければいいんじゃないか
という結果のもと
できた

それこそたぶん世界で最強じゃないだろうか一機の特別な愛機が
でテスト結果のもと零戦の2倍はいいとされる

技師と喜び合った

これならどんなネウロイでも倒せる

ちなみに新しい機関銃もきた25mmの機関銃だ
速射 弾数200発 どれも文句ないひとつ言えば重い

これでそろった

あしたスオムスに殴りこみだ

早朝 まさに日本の軍隊は厳しすぎる 日の昇前に起床

「うう〜ツラ」

だから優秀な人材がいるんだけどね

シートを掛けられたストライカー 機銃が運び込まれる

「やだな〜船かよ」

もちろん苦手で酔いやすい

今回はあの技師が専属としてついてってくれるみたい

顔はものすごくイケ面 古風な日本の感じなんだ

うっついな〜 あんた魔力使えんじゃないの

彼の名前は南川 時成

自分も中の上だと思いがずるいぞ〜あんなにいい遣伝子

と思っっているうちに出港

長い旅路に就いた

極寒の地へ転属（後書き）

ご購入ありがとうございました 感想や意見を募集しております

いざスオムスへ(前書き)

ううん 前作短いし今作も普通ですどうぞ

いざスオムスへ

「おええー気持ち悪い」

「大丈夫ですか??」

「なんでお前そんなに平気なの??」

「そりゃあ 普通ですよ」

僕たちは 航空母艦 加賀に乗っている

「この戦艦の進水式の時くす玉が割れないという縁起の悪さが付いているみたいなんです」

「もっとましな艦はなかったんかい」

「仕方ないんですよ でもトラックごと運べるのは便利ですね」

トラックには扶桑からの食糧やストライカー ストライカー予備部品 などなどいっぱい入っている。

「ふう もう一週間ものっているんだぞ」

「我慢してください」

「ちえっ」

飲料水に手を掛けた瞬間

「ウウウウウウウ」

「なんだ」

「敵未確認 飛行物体 高度4000m」

「安心しろ たぶん誤報だ」

「いやそれっぽくないですよ」

「念のため、時成 ストライカーの設置を頼むぞ」

「了解」

10分後

「おおっほんとに警報だった」

「だから言ったじゃないですか」

「心配するな 八雲と吾妻がいる」

「ほんとですか？」

「八雲被弾 直ちに火災を消火せよ」

「・・・」

「ダメじゃん」

「くっそ」

「じゃあ行くぞ」

「鹿權院 出る」

「おおっウィッチだー」

「行くぞー!!」

新型の25mmは凄い ネウロイの装甲をもろともせず見事に貫通した

「オツケー 反応がなくなった」

「おおっ凄いぞー」

「救世主だー」

「ふああ疲れたし寝む」

「着艦許可願う」

「こちら管制室 どうぞ」

「あれ なんで男性が飛べるの」

「そっついう家系だったから」

てな質問も適当にスルー

「どうでしたか 新型ユニットは」

「バッチシでしょう 機動 速度 ともに最高値でしたよ」

「えっへん」

「でも やはり機体がついな なんかもっといい機体にしてほしい」

「うっうん考えてみます」

「頼む」

その時 立っていた足元がふらついた
危うく転倒しかけそうなところを押さえしてもらった

「大丈夫ですか??」

「ああ とんでもないじゃじゃ馬だよこいつは」

と言つて自室に戻った

三ヶ月後

あの日のネウロイの来襲以外特に危険なことは無かった
して言えば葵の船酔いは悪化していくのであったが無事スオムス
に辿り着いた

軍港からカウハバ基地までは1時間

義勇独立飛行中隊の資料に目を通した

そしたら最低 どのつもこいつも落ちこぼればかりである

穴拭智子

自分に過信し過ぎかな

迫水ハルカ

新人

エルマ・レイヴオネン

ホントに中尉??

エリザベス・F・ビューリング

過去にいつぱい問題ありそう

キャサリン・オヘア

ストライカー壊し過ぎ

ウルスラ・ハルトマン

姉のDNA受け継いでいるかも

とまあ最鋭部隊と聞いたが・・・酷いもんだ

んな物を見ていたら眠たくなってしまいたぶん記憶がすっ飛んだ

一時間後

極寒のスオムスに来た

珍しく見送りに来ていか

「義勇独立飛行中隊歓迎します」

穴拭智子少尉だ

「ありがとう レズのエースさん」

「わ、私はノーマルだ」

「くくく」

「貴様初対面では失礼じゃないか」

「たしかビュウリングとかいったな」

「ああっ」

「貴様 扶桑に一度来い 徹底して根性直してやる」

「結構です」

「じゃあな俺は長旅で疲れているんだ」

自分の部屋へと歩いてった

よし荷物はどっにかおけた おやすみなさーい

どんどん

「きつ貴様さつきは良くも」

「何だよ騒がしいな」

「トモコ落ち着くのねー」

「ゆるせない」

「でっ 何がしたいの」

「とっ巴戦を持ち込みにきたんだけっど」

「はっ」

「.....」

「寝言は寝ていえ」

「くそ〜 ホントはあんた弱いんじゃないの」

「なんだって〜」

「そもそも男性だから飛べないのかもねー」

「わかった巴戦やってやる」

「ルールは同じ高度ですれ違ったときから開始 ペイント弾の使用
でいいね」

「仕方ない ハンデとして目隠しでいい」

「そんなこと 有りなの??」

「目があったら 1瞬で落とせる」

「なに——————」

「まあまあトモ」落ち着くのね」

「南川 ちょっと手伝ってくれ」

「どうでしょうか」

「まあ見て置け」

鹿権院は約束通り目隠し

「思ったんだけどあれじゃすれ違えなくない」

ビューリングが言った

「確かに」

エルマも頷く

「なんだあのストライカー 見たことないぞ しかも機関銃デカ」

「私 アンナの見た事ありません」

「あれは30mmなんですよ」

「ストライカーは??」

「名前ないんです でも零戦の2倍近く出ています」

あんぐり口のハルカ

「でも舵が効かないんじゃない??」
ビューリング

「まあ見ててください」

ニコニコの南川

すでに滑走の時点で穴拭を離している

「行くぞ」

「でもでも 目が見えないのにどうやって敵を見るんですか」
ハルカ もし自分にもできれば メガネとはおさらばである

「それは秘密です」

南川がくすくす笑っている

見事にすれ違った

インカムから開始の声が聞こえる

先手を取ったのは穴拭だった

しかし見事に回避機動をとる

穴拭は

「えっ」

と声を漏らした

なぜなら相手は目が見えないのである

そこから見事なループを書き キ27と試作機は速度差があるから
ハイヨーヨーでお終い

あっけなく終わった

「どうだもう一本やるか??」

「いい」

穴拭はそーとーなショックを受けたろう

「またな」

そう言って地上に降りた

く地上サイドく

「どう これが奴の正体だよ」

「.....」

誰一人言葉を発しない

なんと奴は目隠ししたまんま着陸までした

「お疲れさん」

「おっす」

「俺どうだった??」

「まさしく モンスターだね」

「照れるな」

「まあ まだ新体制だからゆづことですか」

「あれ」

場は凍りついている あれだけ強い中隊長が負けるなんて信じられな
いらしい

「ふああああ まあいつか」

そうして自室に行くのであった

夕方

「あれいなのか智子」

「ああ お前が凄過ぎてショックを受けてる」
ビュリング

「そうか軽くやったつもりなんだけどな」

「ねえねえどうしたら目が見えなくてもそんなに当たるの??」
とハルカ

「悪いけど秘密だ お前は六弐少尉が好きなんでしょう??」

「なんでわかるんですか??」

「顔に書いてある」

「さて食事をとったら飛ぶか」

「飛ぶ?こんな時間に??ユー頭どうかしてるねー」

「残念だがいつネウロイが来るかわからないからな 夜間哨戒をす
るんだ」

「へー」

「第一中隊にはたぶんいるがナイトウィッチがいないんだ
少しでも手柄を立てたいだろ?」

「うん」

「あの」

「なんだ エルマ」

「いま穴拭中佐に全員嫌われてるんです」

「そうか 更に大変なショックだったなw」

「じゃあ行ってくるな」

「おう」

「あつそれと」

「あいつは頑固だから 大事起こさないと自分の過ちきずかないかな
らな

考えとけなビューリング」

「おう」

「意外とやさしいんですね 葵さん」

「ああっ」

そう言って夜間の空に出るのであった

いざスオムスへ（後書き）

ご購入ありがとうございました
また頑張ります

初出撃そして負傷（前書き）

今度からマイペースに更新してこようと思います。

初出撃そして負傷

夜間哨戒中凄いものを見た

オーロラだ

扶桑の最北端でも見れないオーロラ
北に来たんだなーと思ったら通信が

「どちらでしょうか」

「オーロラシャ空軍少尉 サーニャ V リトヴァクです」

「こちらは スオムスの義勇独立飛行中隊の 鹿權院 葵です」

「扶桑の方ですか」

「はい 今日 いや正確には昨日派遣されたんですよ」

「そうですね どうですかこちらの空気は」

「やっぱり寒いですね」

「そちらはオーロラ見えますか」

「ええ」

「そうですね」

「このくらいのオーロラはめったに見えないんですよ」

「そーなんですか」

しゃべっているうちに夜が更け切った

「じゃあまた」

「ええっ」

ああっ魔力使い果たした

着陸した時に・・・まあ着陸は成功したがフラックとして倒れてしまった

「アオイー!!」

「ごめん 自室まで連れててくれ」

「あれあと ビューリングと新入りは??」

葵の部屋前

「おきてくださいーい」

エルマ中尉の声

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「入りますよー」

「おきてくださいーい」

「すう すう」

「あっそっか 夜間哨戒で朝方に帰ってきたんですね。そっとしときましよう」

「新入りは??」

「夜間哨戒でくたびれています」

「そっか・・・ならいいんだ」

吹雪の中で訓練しようとする穴拭
それをだるそうに見る自分

この部隊でやっていけるのかと心配になった

のほほんとしてネウロイが来襲しないまま時間が過ぎて行った
2週間たったある日

(あいつ 何やってんだ??)

自分の目線の先には 穴拭の姿が
穴拭は新聞を読んでがっくりと肩を落とした

「よお 穴拭 どうしたんだ??」

「そんなに軽々しく私の名を呼ばないで」

「わかった レズのエースさん」

「切るわよ」

「ソーリイごめんなさい」

穴拭は席を立って外に出ようとした

「オイ、どこ行くんだ」

「ちょっと 散歩してくる」

「今日は行かない方がいいぞ たぶんネウロイの来襲がある。」

適当なこと言った もちろんこの発言に自信がない
穴拭は無視してどこかへ行ってしまった

「さあ いらん子はだーれもない」

そう呟くと格納庫へ向かった

「どうだ〜南川 調子」

「う〜ん今一つですね 部品の供給が大変ですね。」

「そうか・・・やっぱり一品物だからか??」

南川は相変わらず苦戦していた

「ウウウウウウウウウウウウウウウウウウ」

「なんだ」

「大型ネウロイの来襲 高度不明 位置国境付近」

「らじゃあー」

「オケー？ 南川」

「ハイ！！ 機関銃はどうしますかな？？」

「30mmで充分」

「第一中隊 アホネン大尉殿」

「何かしら」

「私は義勇独立飛行中隊の物ですが。編隊組ませてもらえませんか？？」

「なぜ??？」

「あいにく隊員が外出中な物で」

「それは可哀想に でも答えはNOね」

「なぜですか」

「穴拭が嫌いだからよ」

その瞬間神経が切れた
覚えとれ 第一中隊

「独断で落とさきつてやる」

と呟いてから
戦場に来た

途中に基地のジープが見えたがまあ気のせいだろ

「ふふふふふ」

もはや錯乱している

敵は20余機 一人でやれない相手でもない

やってやる

く穴拭サイドく

「なんで出払っている時に」

穴拭は急いで基地に戻る

そこで一機の機影が見えた
新入りだ。

ずーと戦闘待機してたのである

「今日には行かない方がいいぞ たぶんネウロイの来襲がある。」

あの時間いとけばよかったと穴拭は後悔した。

く葵サイドく

「へへへ 余裕余裕」

なんていいながら機関銃をぶっ放してた

そのとき 片方の魔道エンジンがとまった

「お、おいしっかりしろ」

魔力を送るがエンジンは動かない

「くそー」

遅いストライカーなどいい的

ネウロイは一斉の機銃掃射する

見事に被弾し意識を失った

30分ぐらい意識を失ってただろうか
気が付いたら野原に不時着していた

「きれいだなー」

空には満点の星空である

このまんま死んでもいいと思った

軍用ジープのエンジン音がした

シヨックで首が回らなくなってしまったがまあ見方だろう

「おい、いたぞ担架だ 担架持ってこい」

「大丈夫ですか？ 葵さん」

「結構、重傷だ」

「この雪がクッションになってくれた」

「この雪国ならではのですね」

「ストライカーは??」

「来る途中にありました。だからこのあたりにいるんじゃないかと??」

「そうか迷惑かけてすまなかつたな」

「いえいえそれより葵さん20機撃墜おめでとつごぞいます」

「少佐もさぞかし お褒めになると思います」

「そうか・・・」

20機ぐらい普通なんだが
と心の中に呟いた

「せーえのせつ」

と自分はジープ載せられた。

「とりあえず 医務室に運びますね。」

「ああっ」

基地に着いた時 皆が向かいに来てくれた。

「葵さん」

「南川 ストライカーに不具合だ」

「はい」

「左エンジンに途中で止まる」

「調整してみます」

そのあたりに第一中隊 義勇独立飛行中隊
がいたが話必要がなくてそのままスルー

医務室へと運び込まれた

ベットで寝ていると

「葵平気？」

と言って義勇独立飛行中隊が来た

「ほそほそ」

「葵？聞こえない」

「なぜおまえらは居なっかつたんだー」

ついに激怒した

「特に穴拭とエルマ」

「お前は中隊長だろう お前が居なっかつたら誰がまとめるんだ」

「ひい ぐめんなさい」

「穴拭！」

「な、なによ」

「お前はな なぜカールスラント組が手柄をあげているのにそれで
もいいのか??？」

「いいわけないじゃないの」

「じゃあなぜ 居なかつた??？」

「それはへこんでちょっとフラフラと」

「だからダメなんだ。エースという物、常に飛行基地で待機！それ
くらい当たり前だろ」

「あ………あんなんかに何がわかるの!!!!!!」

穴拭は泣きながら部屋を後にした

「穴拭 待つねー」

「おっおい」

一気に静かになった

ふうもう疲れたといって寝た

三時間後位に目が覚めた

「ストライカー履いていたから 足が捻挫しているわね。松葉杖を
ついて移動してください」

「ええっじゃあ戦闘はどうなるんですか」

「残念だけど三日は安静にしているね」

「そんな」

松葉杖をつきながら宿舎（倉庫）へ行った

初出撃そして負傷（後書き）

ご購入ありがとうございます

実はここから先 物語できてないんですよねw
時間がかかりそうです

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4765v/>

スオムスへ派遣

2011年10月8日20時55分発行